中国語⇄日本語翻訳の要領

今富正巳著　東洋大学教授

監修●藤堂明保・香坂順一

中国語研究学習双書11

4K371
144

中国語⇒日本語翻訳の要領

今富正巳著　東洋大学教授

監修●藤堂明保・香坂順一

中国語研究学習双書11

全15巻●光生館

26990

中国語研究
学習双書

中国語⇄日本語翻訳の要領

著者紹介

1922年中国瀋陽に生まる
満洲医科大学薬学専門部卒
上海復旦大学中国語文学系卒
NHK国際局，報道局に勤務
その後，二松学舎大学講師，
教授を経て，
現在　東洋大学文学部教授

定価 ¥ 880.

昭和48年1月10日　初版発行

著　者　©今冨正巳
MASAMI IMATOMI
発行者　中川豊三郎
印刷者　春山宇平

発行所　株式会社　光生館
〒112　東京都文京区大塚2～1～17
振替東京 130621　Tel.(943)3335(代)

共立社印刷・佐抜製本

著者の承認をえて検印を省略しました

監修者のことば

日本と中国との，ありし姿，あるべき姿を，根底から反省する時がおとずれた。それにつれて，中国語を学習しようという日本人が急速にふえており，同時に学習者の志向も一様ではなくなってきている。

これまで，日本の中国語界は，まず体系だったテキストを編むこと，さしあたって学習の用にたえられるだけの辞典・参考書を出すことなどで，手いっぱいであった。したがって，多様化してゆく学習者の要望にこたえうる企画を顧みるだけの余裕がなかった。

ことばの学習においては，集中的に基礎を固めながらも，そのことばのはなされている社会と文化の理解に努力しなければならない。それは自分をうつして対比させてみる鏡である。また，とうぜんのことながら，ことばそのものにあらゆる角度から接近し，基礎という核に肉付けをしなければならない。

本双書のねらうところは，この「あらゆる角度」を，日本における中国語という特殊な事情を考えにいれつつ設定し，核の肉付けに役立たせようとするところにある。学習者はこの双書のどの巻かによって，自らの学習の方向をたしかめることができるであろうし，またどの巻かによって，中国語というものの輪郭をさぐることができるであろう。ただ，今日まで，この双書が取扱うようなテーマ・内容は，部分的には公にされたものもあるが，1冊にまとめるという試みは，まったくなされていない。それだけに，

32768

執筆者はたいへんな時間と労力とを費さなければならないのであるが，私たちは，中国語の普及と向上，日本における中国語教育の正しいあり方を求めるためには，このようなものが，ぜひ必要であると考え，ここに志を同じくする方の協力をえて，具体化に全力を傾けることにしたのである。

1971年8月28日

藤堂明保
香坂順一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序　　言

中国語は，歴史的に眺めれば，本来日本人にとってはたいへん親しみの深いことばであり，この感じは今日も生きている。このような親近感は，日本人の中国語学習にとってたいへんプラスになっていることを認めねばならないが，同時にこの親近感が一種の安易さを呼び，日本人の中国語学習や理解の仕方を浅薄なものにしていることも事実である。

心情的な親近感がどうあろうと，言語としての中国語は，日本人にとっては他の外国語と同じくやはり「外国語」なのである。

外国語であるからには，中国語にはいろいろな点で日本語とちがうところがあるのも当然である。初級程度の学習を終った人びとにとっては，もう一歩進んだ立場から日中両語の相異点と相似点を検討するための反省的な段階もまた必要なのではないかと思う。本書は，そのような学習者を対象として想定したうえで，筆をとったものである。

なお，本書におさめたのは，紙幅の都合で，所載のものに限られたが，本書の趣旨に従って述べたいことは，ほかにもまだたくさんある。それらについては，他日述べる機会を得られれば幸いである。

これを書く過程で，助言や忠告を賜った，監修者藤堂・香坂両先生をはじめ二松学舎大学熊野正平先生，一橋大学山口左熊先生，光生館の石尾弘二郎氏に対して心からお礼を申上げる次第である。

1972. 11. 1.

著　者

目　次

序　言……1
翻訳の「要領」について……(1～4)
第1章　加訳—原文にないことばを加えて訳す—…(5～12)
第2章　不訳—原文にあることばを省略する—……(13～35)
§1.〔都〕を不訳にする例……13
§2.〔却〕を不訳にする……16
§3.〔則〕を不訳にする……17
§4.〔而〕を不訳にする……18
§5.〔乃是〕を不訳にする……19
§6.不訳になる接続語……20
§7.限定語を不訳にする……23
§8.不訳になる指代詞……24
§9.〔用以〕を不訳にする……27
§10.動詞を不訳にすることもある……28
§11.〔并〕を不訳にする……34
第3章　分訳—一つの文を分割して訳す—……(36～42)
第4章　変訳—文の要素や品詞を変換させる—……(43～48)
第5章　逆訳—日本語と中国語は語序がちがう—…(49～69)

§ 1.　主部とその状況描写が逆訳になる……50
§ 2.　限定語の位置が変わって逆訳になる……51
§ 3.　特定語を境界にして逆訳となる……53
§ 4.　目的理由が後にある……57
§ 5.　状況を説明することばが後にある……58
§ 6.　前後に並んだ肯定と否定が逆訳になる……59
§ 7.　並列した副詞の訳し方……63
§ 8.　その他の訳序の変更……64
第6章　使役形—"～させる"ばかりではない—……(70～99)
§ 1.　(～するようにする) と訳すもの……70
§ 2.　(それによって，こうして) と訳すもの……73
§ 3.　(によって) と訳すもの……75
§ 4.　中国語と日本語で語序が逆になるもの……77
§ 5.　〔要使……〕(～するには)……79
§ 6.　〔使得……〕の訳し方……82
§ 7.　(～を～する) と訳す使役形……85
§ 8.　〔使・名詞・得到・動詞〕(～を～する)……90
§ 9.　単調な使役形の訳し方……93
§10.　動詞と結合した〔使〕……96
〔指使〕(さし図して～させる)……96
〔迫使〕(～に迫って～させる)……96
〔促使〕(～させる)……97
〔推使〕(～させる)……97

〔务必使〕（ぜひ～させなければならない）……97
§11. 〔让〕と〔叫〕について……98
第7章　標点符号—そのはたらきは文字よりも大きい—
……(100～112)
§1. 引号の訳し方〔“　”または「　」〕……100
§2. 冒号の訳し方〔：〕……104
§3. 破折号の訳し方〔——〕……107
§4. 分号の訳し方〔；〕……109
第8章　“去・来”—動詞と組んで力量感を与える—
……(113～122)
第9章　“进行”の訳し方—持続する動作の表現—
……(123～127)
第10章　“一”の訳し方……(128～134)
§1. 強調する〔一〕……128
§2. （～という）の含み……130
§3. （～として）の含み……131
§4. （およそ～というものは）の含み……131
§5. 数量としての〔一〕……133
§6. （ある～）とも訳せる〔一〕……133
第11章　“有”の訳し方……(135～141)
第12章　“只有～・才能～”—おもて訳とうら訳を使いわける……(142～155)

§1. 〔只～〕のおもて訳 …… 142
§2. 〔只有～才能〕のおもて訳 …… 142
§3. うら訳について …… 144
§4. 〔只有～才～〕のうら訳 …… 145
§5. 〔只有〕を伴なわない〔才〕 …… 149
§6. 〔只有〕を伴なわない〔才能〕 …… 150
§7. 〔必須～才能～〕のうら訳 …… 151
§8. （～するように）と訳す〔才能〕 …… 151
§9. 〔必須～才能～〕のおもて訳 …… 152
§10. 〔只能～〕の訳し方 …… 152
第13章 “～于”の訳し方 ……(156～168)
§1. 〔急于〕…… 156
§2. 〔敢于〕…… 157
§3. 〔勇于〕…… 157
§4. 〔善于〕…… 157
§5. 〔善于〕の否定型 …… 160
§6. 〔有利于〕,〔不利于〕…… 161
§7. 〔富于〕…… 162
§8. 〔易于〕…… 162
§9. 動詞のあとにくる〔于〕…… 162
〔寓于〕…… 163
〔区別于〕…… 163
〔決于〕…… 164

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔存在于〕〔贯串于〕…… 164
〔屈服于〕…… 164
〔决定于〕…… 164
〔依附于〕…… 165
〔出发于〕…… 166
〔在于〕〔到达于〕…… 166
〔根据于〕〔从事于〕…… 166
第14章 “～之～”の訳し方……(169～175)
§1. 〔～之前〕…… 169
§2. 〔～之后〕…… 169
§3. 〔～之下〕…… 170
§4. 〔～之外〕…… 171
§5. 〔～之间〕…… 171
§6. 〔～之一〕…… 173
§7. その他の〔～之～〕…… 174
第15章 目的語になる“之”……(176～180)
第16章 “都”の用法……(181～190)
§1. (ともに)…… 181
§2. (いずれも・どちらも)…… 181
§3. (みな)…… 184
§4. (すべて)…… 186
§5. 〔都〕の不訳について補足…… 188
第17章 内・中・间—時間と空間のわく—……(191～202)

§ 1. 〔时期内〕 …… 191.

§ 2. 〔期间内〕 …… 193

§ 3. 〔时间内〕 …… 194

§ 4. 〔中间〕…… 197

第18章　日中対訳の機微—ためになる例文25題—

……(203～219)

付・日中共同声明 ……(220～229)

翻訳の「要領」について

ひとつの言語から他の言語へ翻訳することは，たいへんな仕事である。日←→中翻訳も例外ではない。よくいわれるように，翻訳とは，一字一字ひきあてて，移して行けば仕上がるようなものではない。また，時には対応することばすらなく，ひきあてるわけにもゆかないことがある。またよくいわれることであるが，翻訳とは，原語の中にある思想，概念を別の言語体系によって，再創作することである。たとえば〔再见〕は（さようなら）と訳されるが，家を出て学校へ向かおうとする子どもが〔再见〕といえば，日本語では（いってまいります）と訳さねばなるまい。これなどもささやかながら再創作といえる。本書は翻訳についての一般理論を述べるのが目的ではないので，詳しくは論じないが，具体的な例文についての説明の中で，必要な範囲で翻訳の心構えを述べた。

さて，この中国語研究学習双書が計画されたとき，本書に与えられた性格は，次のようなものであった。「これは単なる中国語解釈法でもないし，中国語作文法でもない。中国語のある表現をどのように日本語に移したら自然な日本語になるのか，日本語のあるセンテンスを中国語に訳すばあい，どうしたら無理のない中国語になるか，その‘コツ’ともいうべきところを実例をもって懇切に説明する。」ここで問題になるのは，要領とか‘コツ’とかいわれるものである。わたくしの人生体験からして，何事によらず，要領とか‘コツ’とかいうものは，由来ことばや文字では表わせないものときまっているようである。だから，要領や‘コツ’そのものは学習者が自らの試みや誤りを通じて会得してもらうより他はない。しかしながら，要領や‘コツ’を会得するために都合のよい条件を提供したり，そのお手伝いをすることは可能である。

本書は，学習者に一方的に教えるのではなく，共に考えることを基本姿勢とした。したがって，わたくしは，もしも，いくつかの例文を並べることによって，自然に理解できるようなことがあれば，できるだけ説明を少なくし，どうしても必要な場合に限って，説明をするという方針をとった。結果として，たいへん多くの例文がひしめくことになったが，一定の方針で整理されているので，‘コツ’も自然にわかるはずである。

例文は，主として毛沢東著作をはじめとする現代中国の論説，声明文，それにこの一，二年の中国の新聞雑誌から引用し，またそれらの訳文も能う限り当事者の公式訳から引用した。これらは，新しい中国の文章を学ぼうとする人びとにとって，恰好の材料だと思う。

次に，一定の単語，語句語型は，前後の文脈の中でこそ生きた意味を持ってくるものである。ゆえに，例文は所要の語型や単語を含む全センテンスをかかげるように努めた。この方針は一見むだなようにも見えるが，その中にもいろいろ参考になることがあると思うので，例文は多角的に利用されたい。18章までを一通り見終った後に，各章で得た手法を活用しながら，もう一ぺん読んでいただけば効果は何倍にもなると思う。

学習者が中→日翻訳に当たるとき，まずいわゆる「直訳」を行ない，ついでそれを基礎にして自然な，きれいな日本語に移すことが望ましい。直訳，つまり形式的な翻訳の段階では，いわばごまかしが少しも許されないから，それを基にして「意訳」に移るのは正しいことであるが，その手続きを省略して，はじめから「意訳」にはしるのは感心しない。基礎が弱ければ，そのあとの仕事も不確かになりやすい。この「直訳」段階の作品を未加工品とすれば，第2段階できれいに仕上げられたものは加工品と考えることもできる。

ここでことわっておきたいが，未加工品かならずしも粗悪品ではない。一部の芸術作品や工業的製作物に見られるように，未加工のそぼくな美

を残すという手法もある。一方，未加工品に原型をとどめないほどに加工して，付加価値を増加するやり方もあるが，翻訳の世界も同様である。また，文章には思想，精神，熱意，感情その他いろいろなものがうずを巻いてこもっているのだから，それらの要素も過不足なく翻訳文の中に移されることが必要である。これは非常にむずかしいことだが，翻訳を勉強する者にとっては，つねに心に留めておくべきことである。

言語というものは，その言語を使う集団の歴史を背負ったものであるから，おのおのの言語は，その集団の考え方，価値観，自然観等々すべてにわたって，独自性を反映している。したがって，つねに異なる言語が相互に対応する語彙，語型をもつとは限らない。いや厳密に言えば，そんなものはないのが当然であろう。たとえば雨の国日本には，つゆ，さみだれ，ひさめ，はるさめ，しぐれ，ゆうだち，とおりあめ，きりさめ，こぬかあめ，てんきあめ等々，雨の種種相を示す語彙は豊富である。この場合，一語ずつ対応する語彙を中国語に求めることは無理である。一方，中国語には〔转、回、巡、廻、循、周、旋、绕、环〕等々，「まわる，めぐる」がいろいろあるが，日本語にはこれほどの分類はない。これは中国人の論理性やすぐれた思弁力を反映したものである。またたとえば，「副業」という語彙は形式的には日中両語で重なるかも知れないが，その実体はだいぶかけ離れている。つまり現象や事物の分類整理の仕方において，おのおのの言語によってかなりの違いがあるわけである。

しかし，われわれはその違いを克服して翻訳をしなければならないのである。ともかく，右から左へとただことばをおきかえても翻訳にはならないのであるが，この面ばかりを余り強調しすぎると，完全な翻訳は究極的には不可能であるという極端論も出てくる。しかし，わたくしは，人間の考えることである以上，一定の補足や説明をつけたり，適当ない

いかえを行なえば，翻訳は可能だと思う。とにかく，翻訳というものは，一定の法則にしたがって行なえば，自然にでき上がるといった性質のものではなく，人為的な作為を加え，総合的な知識を動員してはじめてできることである。本書は，それをどのようにやるかについての一端を述べた。

次に本書は日→中，中→日の両種の翻訳について述べることを本旨としているが，とくに両者を分けないで，そのつど必要な説明をすることにした。わたくしは，よい中国文を書く近道は，すぐれた中国文を日常からたくさん読むこと，おりあらばそのまねをすることであると信じている。ちょうど書道上達の秘訣が名人の筆蹟を飽かずに眺めることにあるのと同じである。本書の場合，外見的には，中→日翻訳についてより多く語っているかのように見えるが，中→日翻訳についての説明も，日→中翻訳を考慮しながら述べてあるので，つねに中⇄日対訳の説明と思って読んでいただきたい。

本書の目的は，解釈法や文法の講義ではないので，できるだけ文法的解説は避け，それよりも文章のもつ「気分」の移行の仕方や，修辞的な手法に重点をおいた。

わたくしは，長年実務機関で日⇄中翻訳にたずさわり，またテレビの同時通訳ということにも手を染めたことがあるが，同僚およびわたくしが実際面でぶつかる問題点は大体きまっていたように思う。それらを整理して並べた結果が本書の内容ということになる。日常ぶつかってきた問題といっても，そんなにたくさんあるわけではなく，項目にしておよそ80項目ほどのものである。しかし，今回は頁数にもわくがあり，一応，基本的なもの，頻度の高いものなど，17項をえらび責をふさぐことにした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com